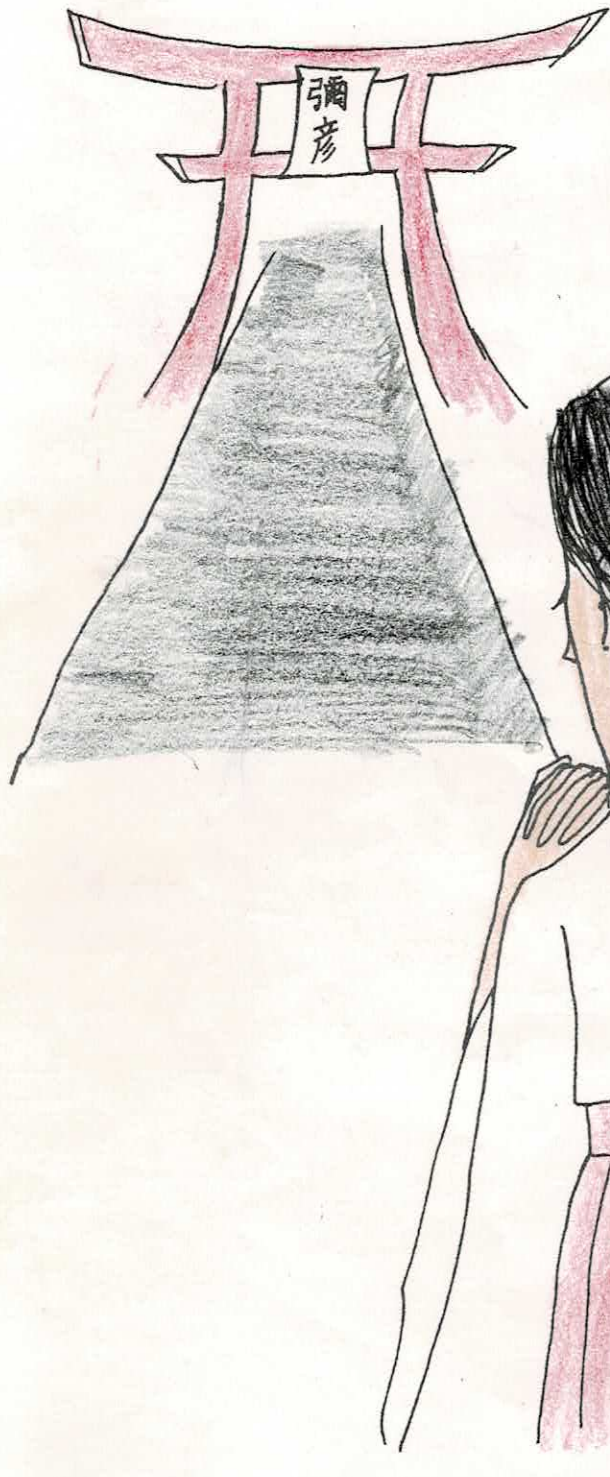


# 弥彦伝説集

作  
I  
LOVE

弥彦

(弥彦小学校六年生)



目次

○ 弥三郎 姿 妙夕羅天女と姿々杉

-2-

○ 泣き仏

-14-

○ 弥彦大神様の雷退治

-22-

○ 湯神社と弥彦温泉発祥の由来

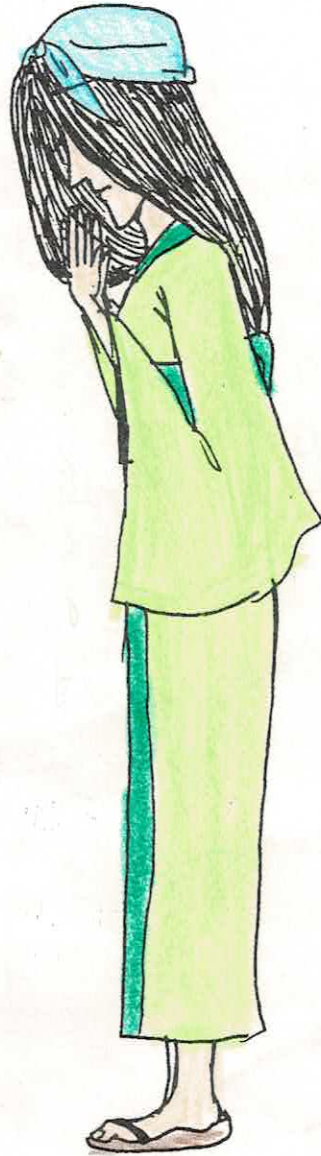
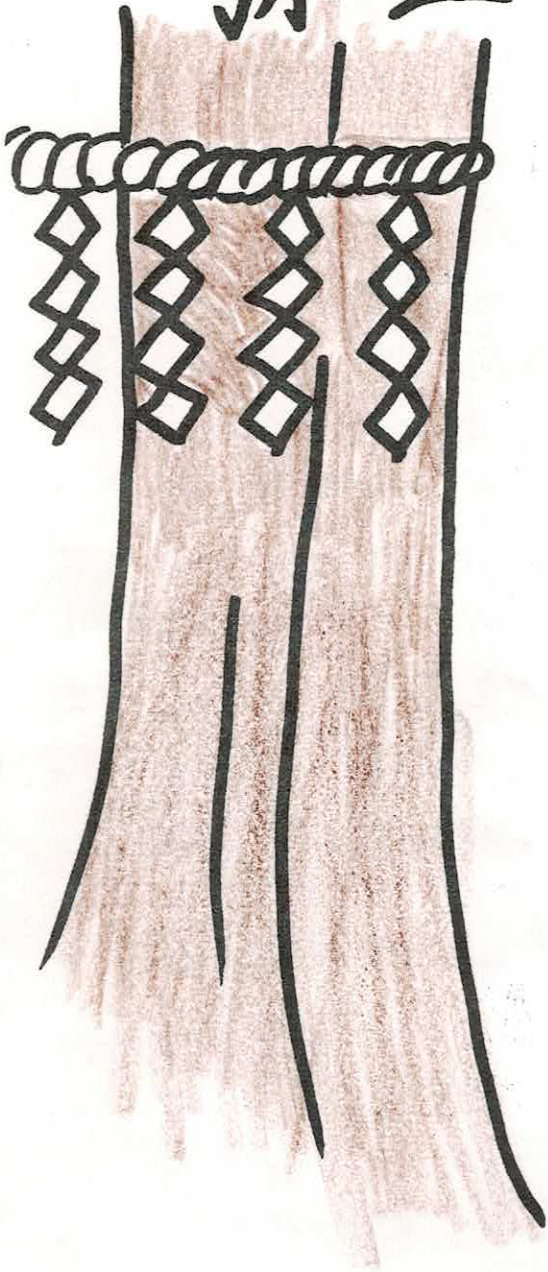
-32-

○ 十宝山の御神鏡物語

-40-

では、弥彦の伝説をお楽しみ下さい。

婆 三 郎 弥



弥彦神社のすぐそばに宝光院というお寺があり  
ます。その宝光院に妙多羅天女像という女の仏様  
が安置されていますが、この仏様、名前こそ美し  
いものの、片ひざを立てたものすごい形相な仏様で  
なんでも、弥三郎婆という鬼婆の生まれ変わりだ  
という話だそつです。

さあ、いつごろになるでしょうか。もうずいぶ  
ん昔のこと、宝光院の近くの村に弥三郎という、  
とても親孝行な男が住んでいました。ところが、  
弥三郎のおかあというのは、いつのころからか  
人の肉を食ふようになっていました。

当時は今とちがって  
 土葬でしたから、誰かが  
 死んで墓に埋められ  
 ては、こっそり掘り出  
 してきて、食べていた  
 のです。  
 そのうち、死人だけで  
 はなく、生きている人  
 もおそろいようになり、  
 村では「神隠しだ」と言  
 って誰も夜には外へ出な  
 いようになりました。



まさか、それが弥三郎のおっかあの仕業だとは  
弥三郎も村の人たちも思わなかったのです。

ある秋のこと、弥三郎は畑仕事がついつい遅く

なつてしまつて、帰る途中で日が暮れてしまいま

した。鎌を片手に家路を急いでいると突然、何者

かがおそつてきました。弥三郎はもう無我夢中で

鎌をふり回しました。すると、

「ギヤ

とものすごい声をあげたかと思つと、その化け物  
かどこへともなく逃げてしまつた。

細<sup>ほ</sup>いとには、しわだらけの  
で、す。うで、三<sup>さん</sup>郎<sup>ろう</sup>はうでを持<sup>も</sup>っ  
て家に帰<sup>かえ</sup>りました。

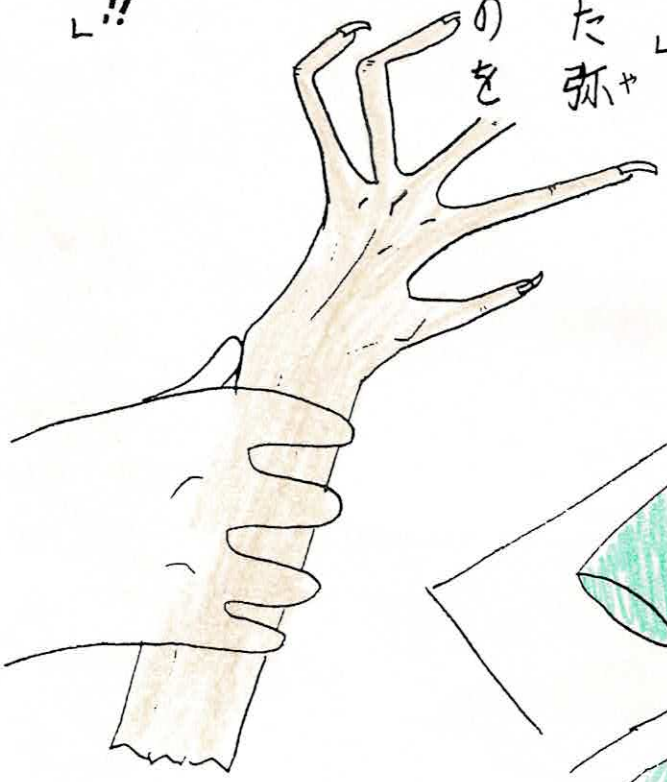
「おっ、かあ、どうしたんだ。

具合<sup>ぐあ</sup>いでも悪い<sup>わる</sup>のか？

そうやさしく声<sup>こゑ</sup>をかけた弥<sup>や</sup>  
三<sup>さん</sup>郎<sup>ろう</sup>の手<sup>て</sup>にうでがあるのを  
見<sup>み</sup>たおっかあは、

「それはおらのうで

ジャー!!



と言ッてすばやくうばいとり、表へ飛ひ出して行  
ッだそうです。そのおそろしい顔を見て初めて、  
弥三郎は自分のおっかあが鬼婆だということをし  
知リ、なげき悲しんで死んだそうです。

一方、弥三郎のおっかあのはうは弥彦山に住み  
つき、墓をあはいたり、人をおそつたりして  
二百年も生きてたのです。村の人は「弥三郎婆」と  
いッておそれていましたか、ある年、宝光院の典  
海という徳の高いお坊さんが



「わしがなんとかしてしんぜよう。」

「といつて、山へ登つていかれました。おそつてき

た弥三郎婆にありがたにお経を唱え、人の肉を食

う罪の深さをこんこんと悟されたのです。

「お前には弥三郎という親孝行な息子があつたそ

うじゃないか。その弥三郎は母親のお前がいつ

までもそんなことをしておるのをきつとあの世

で苦しんでおるであらう。」

「さすがの弥三郎婆も息子のことをいゆれると

はらはら涙を流し、罪を悔いて、典海和尚に許し

をこうたそうです。



そして、それから善人ぜんじんを助たすけて悪わるいやつをこ  
らしめたので、妙多羅天女みょうたらのてんによという仏様ほとけさまになったと  
いうことです。

終わり

と女天羅多妙

杉夕婆女



(妙多羅天女になつた弥三郎婆のその後)

高僧のありがたにお説教に目覚めた老婆は、

今から神仏の道を護る天女となり、これより後

は世の悪人を戒め、善人を守り、とりわけ幼い

子らを守り育てることに力を尽くす。

と大誓願を立て、神通力を發揮して誓願のため

に働きました。

その後、宝光院の近くの大杉の根元に居を

定め、悪人と称された人か死ぬと死体や衣類を

うばつて弥彦の大杉の枝にかけて世人のみせしめ

にしたといわれ、後にこの大杉を人々は、

「波女々杉」と呼ぶようになったといひます。

波女々杉は宝光院の裏山のふもとにあつて、樹齡

一千年を数えろといひ、昭和二十七年、県の天然

記念物に指定されました。

弥彦山の頂上近く、婆の仮住居の跡といわれる

婆々けやき、世を去つた土地といわれる宮多羅の

地名もあります。このけやきは農民が雨乞い祈願

に弥彦山へ登山するとき、必ず鉦目を入れたとい

われている大けやきです。

終わり

☆ は

こんにはちは！わたしたちはI LOVE 弥彦の  
絵本グルーポの弥三郎婆と妙多羅天女と婆々杉  
スタッフです。

ち

この本の作成にあたり小川さんという方から、  
いろいろなお話を聞きました。そのなかで敬馬い

話 No 1 を紹介します。

弥三郎婆伝説は、なんと新潟県内で七十五話も  
あった。

みなさんも敬馬いたでしょう？。本当に七十五話もありま  
した。あらすじはほとんど同じだけど、人を食べて

しまう理由とか全然ちがうのでぜひ調べて、

読んでみて下さい。

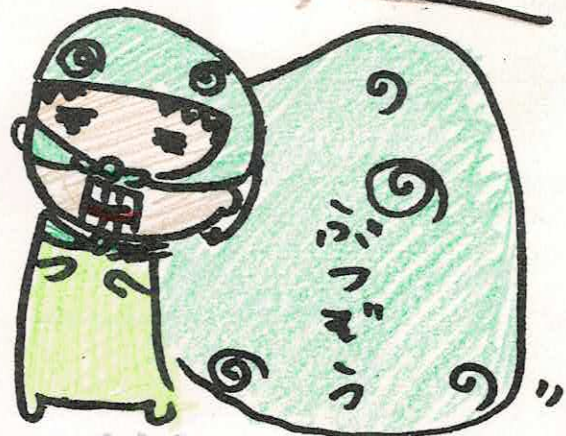
では、「泣き仏」をお楽しみください。

な ぼとけ  
泣き仏



越後に配流されていた  
 親鸞聖人は、弥彦大明神に  
 参拝して、しばらく社家の  
 高橋舎人方に滞在  
 記念にとて残された  
 一体の仏像は、  
 同家で丁重に祀られて  
 その後、ドロボウに、  
 ぬすまれて  
 しまいました。

ずず



ぬきぬし

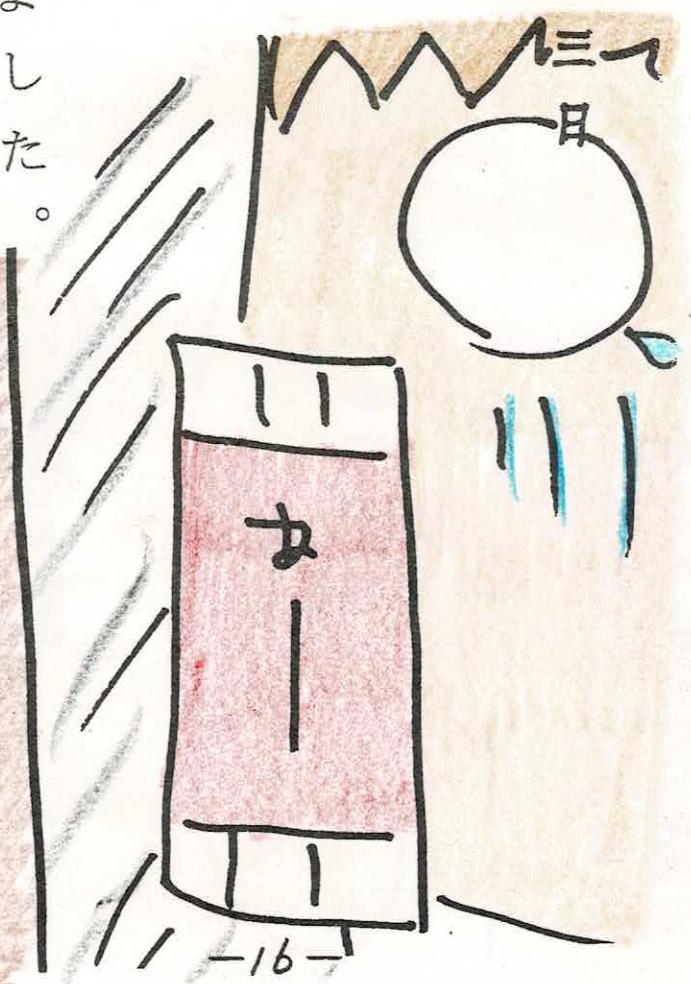
さしぬし

ちどりぬし...のびぬし



仏<sup>ぶつ</sup>像<sup>ざう</sup>をぬすんでから  
 たったある日、  
 仏<sup>ぶつ</sup>像<sup>ざう</sup>がおいてある  
 部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>のまえを  
 通<sup>とお</sup>った  
 ドロボウは、  
 ある声<sup>こゑ</sup>に気がつき  
 ました。

とひらー



ドロボウが見てみると

仏像は、

「舎人へ帰りたいたい・・・」

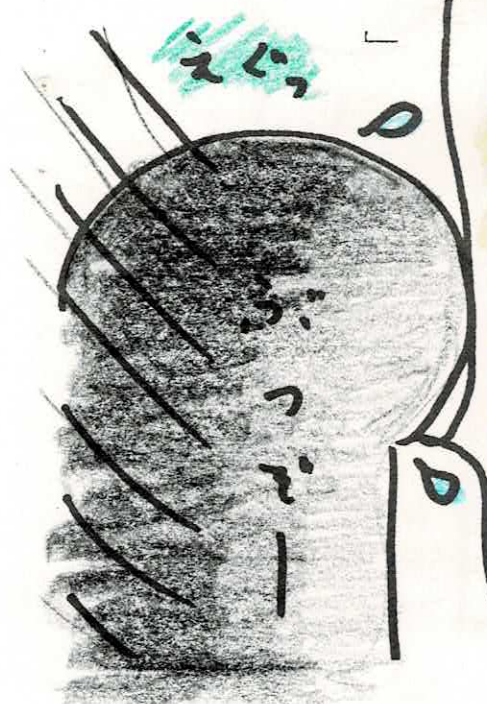
「舎人へ帰りたいたい・・・」

と泣いていました。

「おれ...  
かいだんしほキリイナ...」



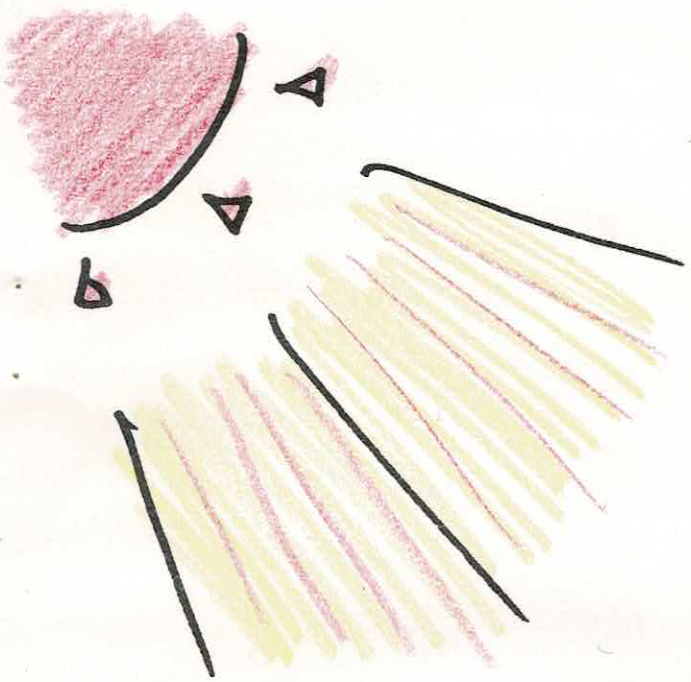
「舎人へ帰りたいたい...  
舎人へ帰りたいたい...」



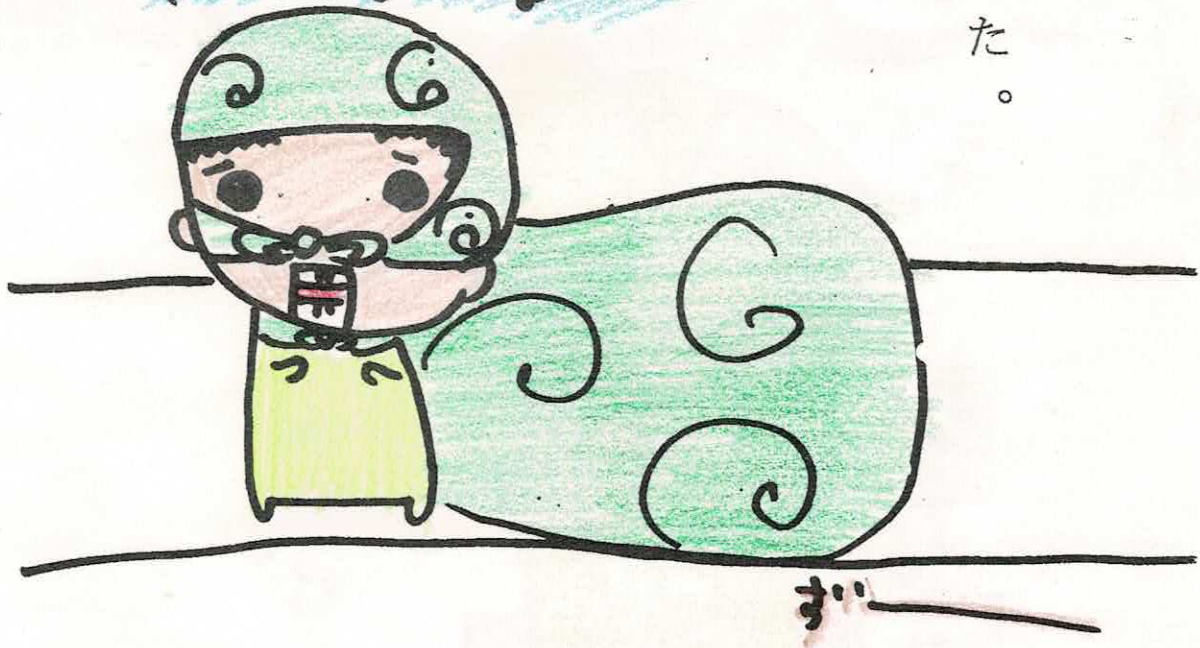
いろいろな手を尽くして  
てみましたが、泣き止み  
ません。



仕<sup>しか</sup>方<sup>た</sup>なく再<sup>ふた</sup>び高<sup>たか</sup>橋<sup>はし</sup>家<sup>け</sup>に、もどすことになりました。



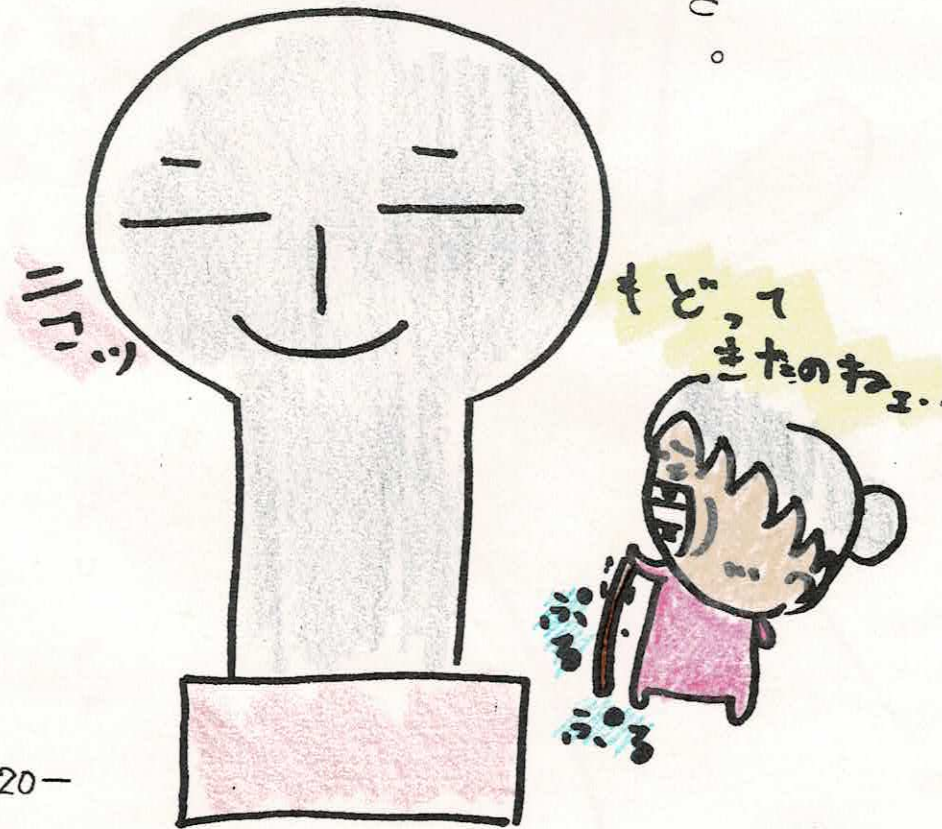
しがたないな——



ず——

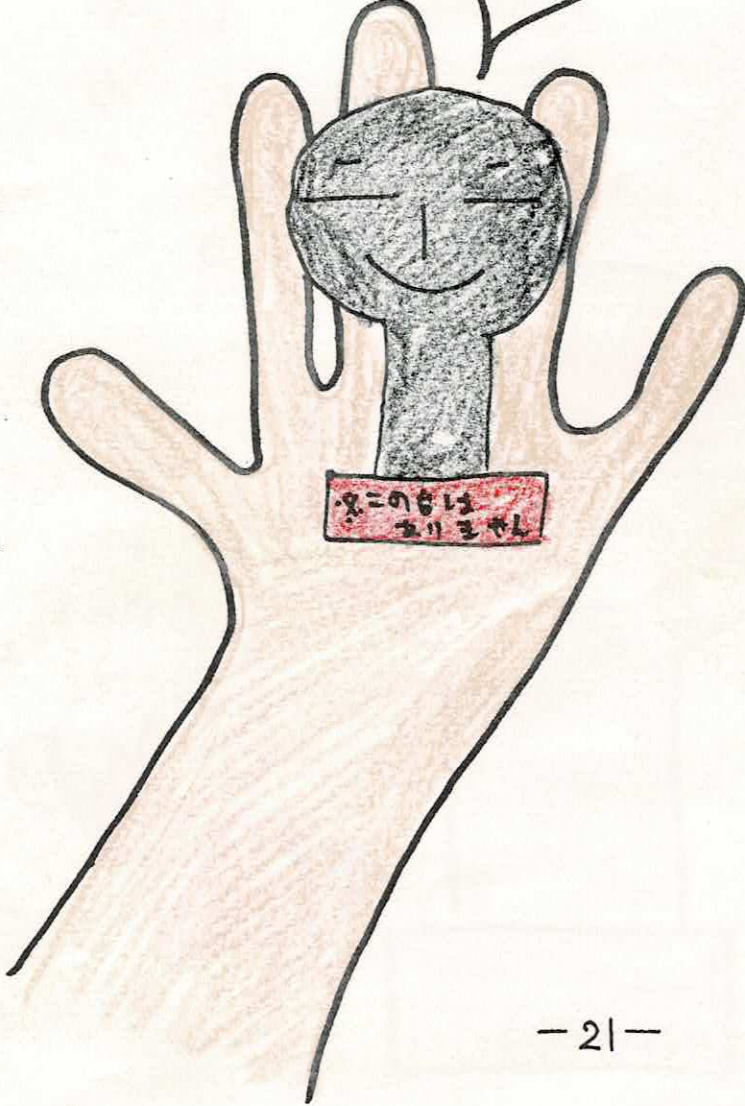
すると、  
仏像は泣くのをやめて  
元の顔に戻りましたとき。

今、泣き仏は弥彦神社に  
保管されています。



# 泣き仏についで

おもしろか、た  
ですか？



う、実、人、泣、な  
で、魔、胡、間、き  
す、に、よ、仏、ほ  
。仏、り、は  
に、デ、本、ほ  
は、カ、当、こ  
、ク、は、小  
な、女、り、さ  
み、り、ま、い  
だ、の、せ、い、仏、  
の、ま、ん、も、像、  
が、た、ら、ん、だ、  
っ、い、て、い、る、  
る、す。

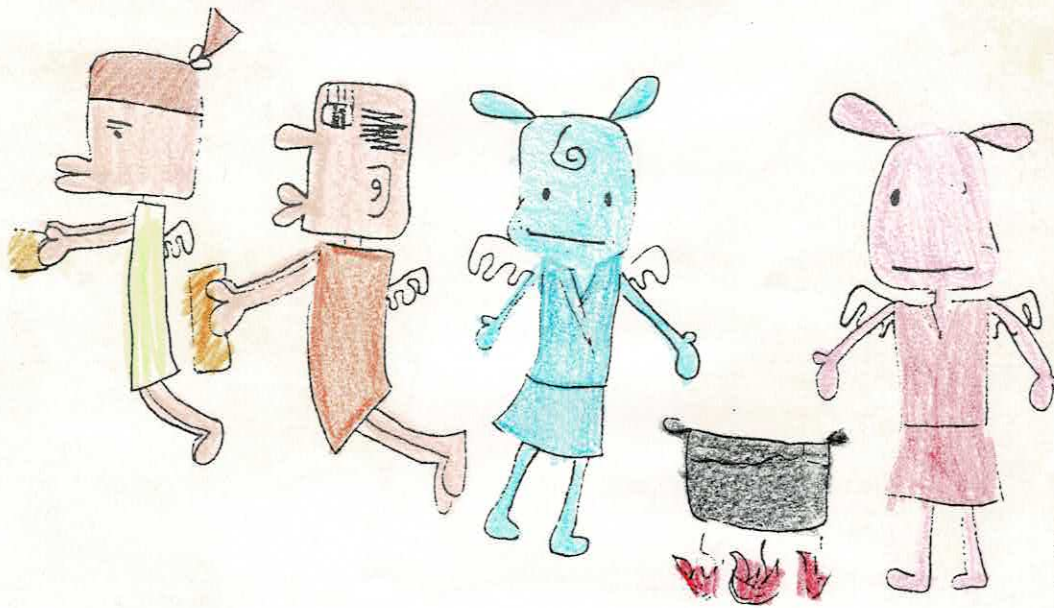
弥彦大神様の

雷退治





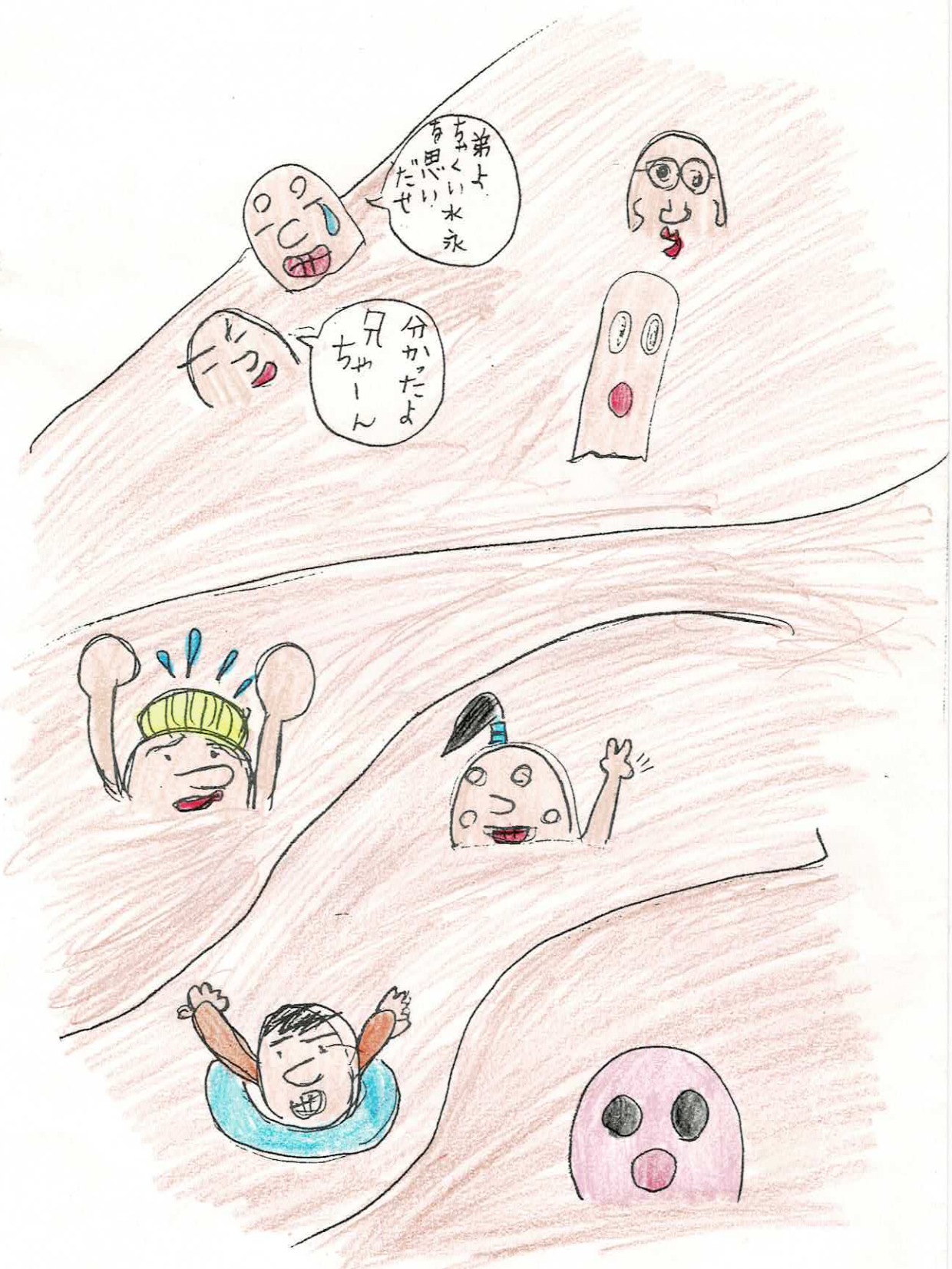
昔々、弥彦大神様がある夏の日、里人に塩をつくる方法を  
 教えていました。







里<sup>さと</sup>人<sup>びと</sup>は<sup>は</sup>大<sup>おほ</sup>喜<sup>よろこ</sup>び<sup>び</sup>！  
夕<sup>ゆふ</sup>方<sup>かた</sup>には<sup>は</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>塩<sup>しほ</sup>が<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。



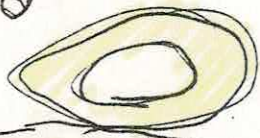
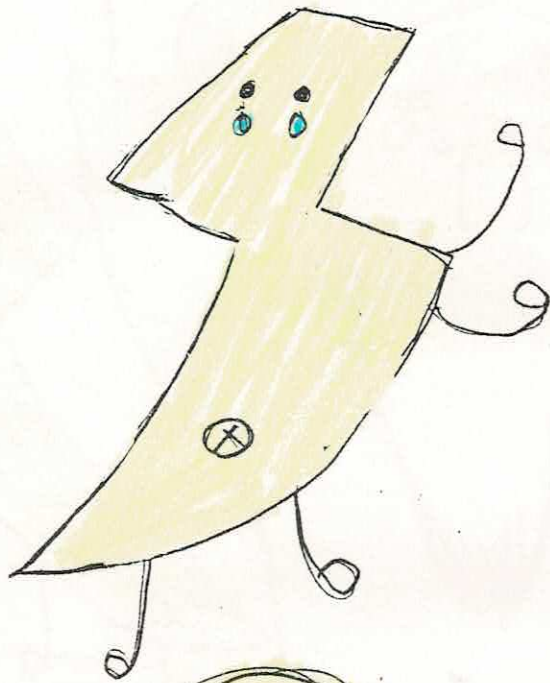
ゴ。ヒ。カッ、ゴ。ゴ。ゴ。ゴ。  
ド。カ。ン。ゴ。ラ。ッ。ビ。ュー。ン。凸  
とつぜん、夕立がふりだし、  
雨もなりました。  
村人がせっかくつくった塩を  
みんな流してしまいました。



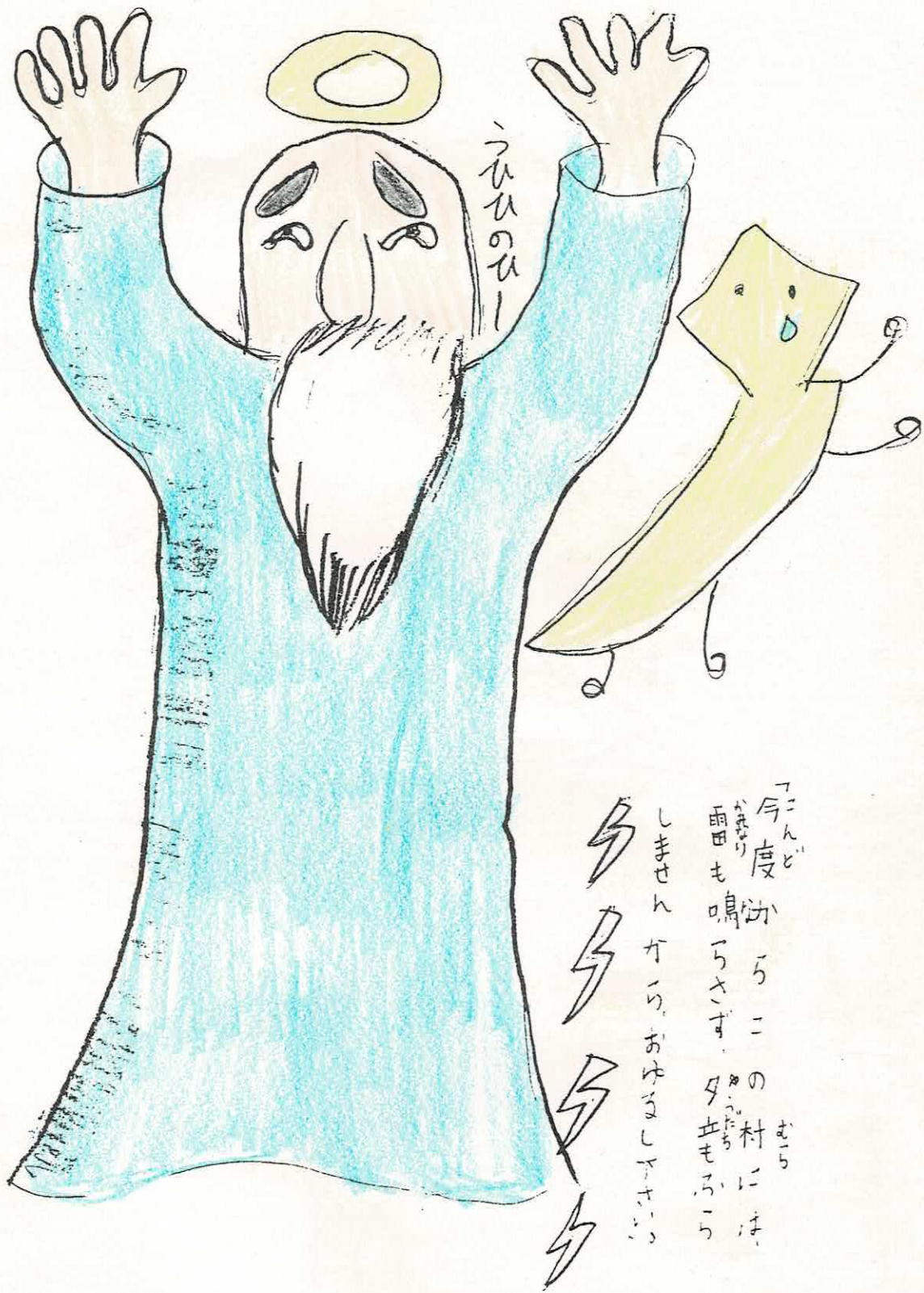
彌彦大神様は天によびかけ雷を  
あつめ、きびしく注意  
しました。



カミナリめっ。ゆるせん。



「もう二度とこんなことをし  
ないようになっ  
て。」  
「はい、ごめんなさい。」



うみひのむし

今<sup>イマ</sup>度<sup>タク</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>ニ<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>村<sup>ムラ</sup>には  
 雨<sup>アメ</sup>も<sup>モ</sup>鳴<sup>ナ</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>夕<sup>ユフ</sup>暮<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>ふ<sup>フ</sup>ら  
 しま<sup>シ</sup>せん<sup>ン</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>お<sup>オ</sup>け<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>し<sup>シ</sup>マ<sup>マ</sup>い<sup>イ</sup>ら<sup>ラ</sup>





こ  
ん  
な  
理<sup>り</sup>  
由<sup>ゆ</sup>  
で  
弥<sup>や</sup>  
彦<sup>ひこ</sup>  
山<sup>やま</sup>  
に  
は  
雷<sup>かみなり</sup>  
か  
な  
ら  
な  
い  
の  
す。





湯神社(石薬師大明神)と  
弥彦温泉発祥の由来……

何という不猫  
の日だ  
やれやれ  
仕方がな  
い  
家へ戻るか

↑ひとり言



夕匹山  
暮れ、のあ弥今  
れ山山峰る彦を  
近鳥夕年権去  
く一をの丸る  
す羽走秋銀郎こ  
もり、とと  
かつ廻朝いー  
りかつ早う千  
疲またく猫毎  
れえがが師の  
果る、らが昔  
てこあ十住  
てとい宝ん  
熊もに山で  
夕かてく、い  
谷きと、弥ま  
のま、彦し  
林せう山た。  
中んさ・  
に。ぎ国  
入一上

やれ  
良きえもの  
ござんなあ



立杖バ突い  
ちて夕然てぼ  
またバ、いん  
し一夕目るや  
た。羽わたのとり  
の大山前と、  
山まきの林山  
鳥な林中道  
が羽中を  
飛音か  
びをら歩

バタバタ

てお負いの鳥  
↓



の  
様<sup>や</sup>矢<sup>ま</sup>は  
子<sup>こ</sup>れは  
の<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>  
ま<sup>ま</sup>鳥<sup>どり</sup>  
ま<sup>ま</sup>の  
飛<sup>と</sup>下<sup>した</sup>  
び<sup>び</sup>羽<sup>はね</sup>  
さ<sup>さ</sup>近<sup>ちか</sup>  
く  
て<sup>て</sup>を  
し<sup>し</sup>傷<sup>きず</sup>  
ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>  
ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>く、  
手<sup>て</sup>  
負<sup>お</sup>  
い

入<sup>い</sup>に開<sup>ひら</sup>き<sup>き</sup>つ<sup>つ</sup>山<sup>やま</sup>の  
り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>け<sup>け</sup>突<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>鳥<sup>どり</sup>の<sup>の</sup>権<sup>けん</sup>  
ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>然<sup>ぜん</sup>し<sup>し</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>、丸<sup>まる</sup>  
し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>、<sup>、</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>飛<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>郎<sup>らう</sup>  
た<sup>た</sup>な<sup>な</sup>行<sup>ゆ</sup>目<sup>め</sup>。ど<sup>ど</sup>び<sup>び</sup>れ<sup>れ</sup>は  
池<sup>いけ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>去<sup>き</sup>て<sup>て</sup>、  
が<sup>が</sup>手<sup>て</sup>前<sup>まえ</sup>林<sup>りん</sup>も<sup>も</sup>が<sup>が</sup>  
あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>が<sup>が</sup>中<sup>なか</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>  
る<sup>る</sup>低<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>を<sup>を</sup>方<sup>ほう</sup>き<sup>き</sup>か<sup>か</sup>  
の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>わ<sup>わ</sup>進<sup>すす</sup>向<sup>むか</sup>ら<sup>ら</sup>  
が<sup>が</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>  
目<sup>め</sup>中<sup>ちゆう</sup>糸<sup>いと</sup>こ<sup>こ</sup>  
に<sup>に</sup>頃<sup>ころ</sup>、<sup>、</sup>行<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>も



池  
↓



あや?  
?



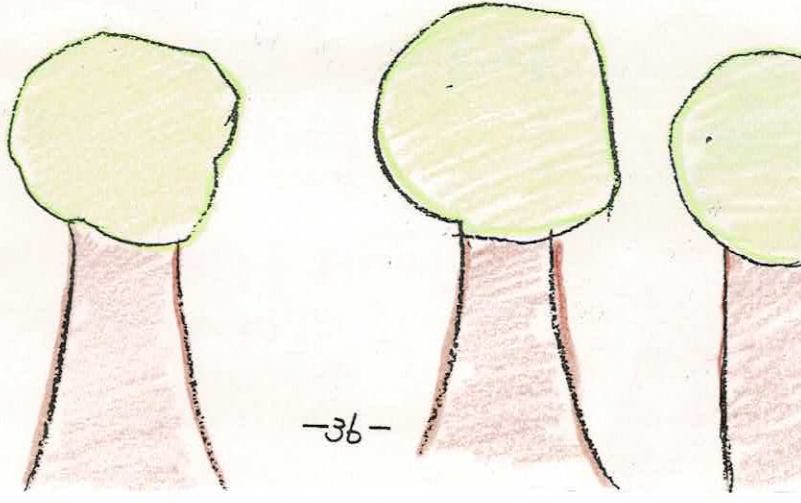
でくか央茂の  
 したさもがるの  
 。んの池る草ど  
 のののコをの  
 鳥中ンか渴  
 獣大こコンき  
 がはン分わを  
 一、とけい  
 緒者先きてや  
 に程程れ池  
 仲菊おいにん  
 良よ損な近と  
 くい湯奇思  
 湯たがっ  
 浴社わわたた  
 み鳥とと権  
 をを出ころ丸  
 しはてろ郎  
 ーじお、は  
 り、池、  
 め、の生  
 いるようたし中

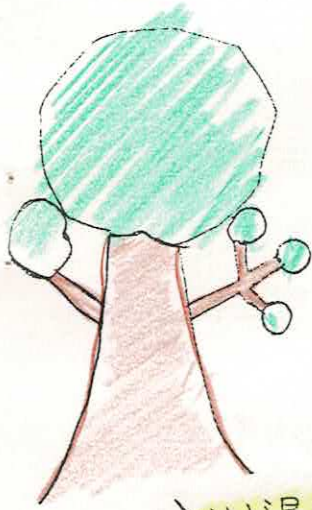


お湯の<sup>が</sup>力<sup>は</sup>減<sup>も</sup>ち<sup>う</sup>ど良<sup>く</sup>、一日の  
つかれが取れていく。  
朝から山中を走り廻<sup>って</sup>受<sup>け</sup>た  
「セカリキス」や「カスリキス」が快復<sup>して</sup>いく  
わい



こゝと  
のくひし  
池<sup>る</sup>ざば  
のくをら  
中<sup>る</sup>打<sup>く</sup>  
にち、  
身<sup>と</sup>、そ  
を身<sup>に</sup>火<sup>つ</sup>  
しに中<sup>と</sup>  
ずつ深<sup>な</sup>  
めけくか  
またうめ  
し衣<sup>な</sup>て  
た類<sup>ず</sup>い  
。をくた  
脱<sup>め</sup>や権<sup>ご</sup>  
い、九<sup>く</sup>  
で早<sup>さ</sup>良<sup>ら</sup>  
速<sup>は</sup>  
青<sup>あ</sup>争<sup>が</sup>自<sup>い</sup>  
か身<sup>は</sup>ハ  
にも夕



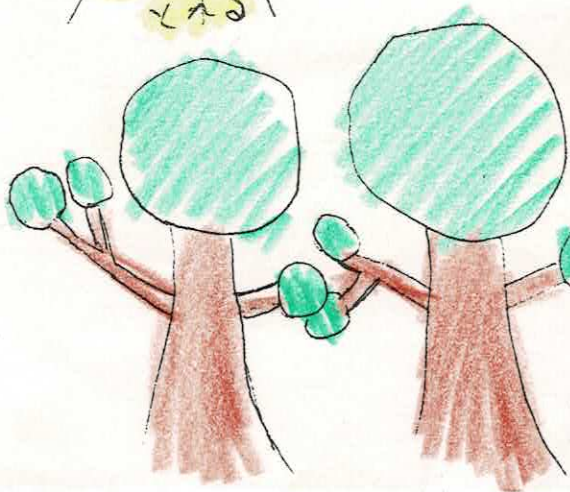


いい湯じゃ



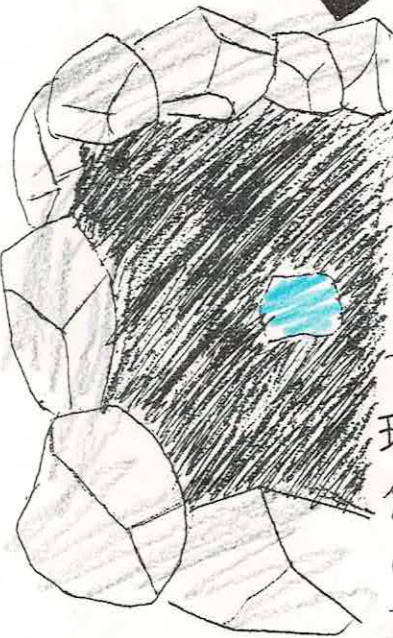
墜くだー

かかネが  
とめる



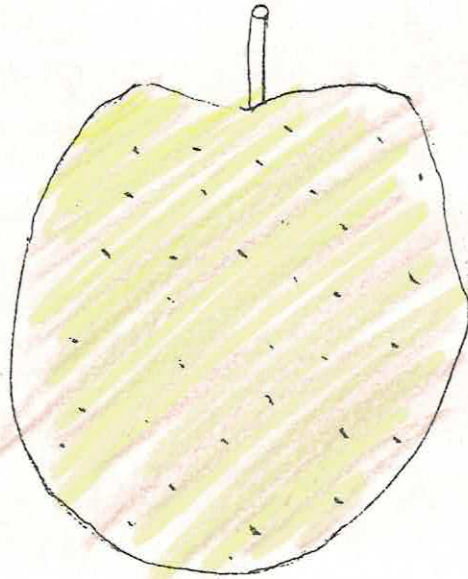
にそてま通論能 あ  
 なの、りりマが木奮持え今ま  
 り名の人、の谷や九人びずや  
 ま声家らしすに郎に急す  
 しもかばば甲のこい、  
 たひ立ちらし言話のでか  
 。びちくしかを事里きり  
 い並のいけ聞き突に狂  
 て人間校が、いを飛喜  
 、でに果洗た告んし  
 大「能にを木たげでた  
 層彌マ、争人びて帰奮  
 な彦谷た、た廻り九く  
 脈の、ちてちりま郎  
 巾霊帯は入はましは  
 い敷はち浴わした取と  
 をしに湯しれた。るも  
 呈とわのたも。ものも  
 す、か評がわれ  
 る遠に判、れ  
 よ近開は言話も  
 うにけ広のと  
 取

ふん出が止  
まっている ↓



完

集<sup>あつ</sup>ず<sup>つ</sup>徳<sup>とく</sup>ふ<sup>ふ</sup> ま<sup>ま</sup>呼<sup>よ</sup>名<sup>な</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>近<sup>ちか</sup>き  
 落<sup>お</sup>か<sup>か</sup>川<sup>が</sup>人<sup>ひと</sup>し<sup>し</sup> し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>命<sup>いのち</sup>・く<sup>く</sup>村<sup>むら</sup>  
 に<sup>に</sup>に<sup>に</sup>時<sup>とき</sup>出<sup>い</sup>か<sup>か</sup> た<sup>た</sup>で<sup>で</sup>の<sup>の</sup>熊<sup>くま</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>  
 霊<sup>たま</sup>に<sup>に</sup>代<sup>しろ</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>。い<sup>い</sup>ニ<sup>ニ</sup>グ<sup>グ</sup>大<sup>おほ</sup>た  
 泉<sup>いづみ</sup>の<sup>の</sup>止<sup>とど</sup>ま<sup>ま</sup>、 ま<sup>ま</sup>神<sup>かみ</sup>谷<sup>や</sup>岩<sup>いわ</sup>ち<sup>ち</sup>  
 の<sup>の</sup>湯<sup>ゆ</sup>初<sup>はつ</sup>ま<sup>ま</sup>時<sup>とき</sup>い<sup>い</sup> す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>集<sup>あつ</sup>を<sup>を</sup>は  
 名<sup>な</sup>明<sup>あ</sup>水<sup>みづ</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup>代<sup>しろ</sup>い<sup>い</sup>。お<sup>お</sup>落<sup>お</sup>背<sup>せ</sup>弥<sup>や</sup>  
 残<sup>のこ</sup>に<sup>に</sup>、も<sup>も</sup> 弥<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>彦<sup>ひこ</sup>  
 り<sup>り</sup>っ<sup>っ</sup>は<sup>は</sup>だ<sup>だ</sup>木<sup>き</sup>つ<sup>つ</sup> 彦<sup>ひこ</sup>つ<sup>つ</sup>守<sup>まも</sup>神<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>  
 を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>ん<sup>ん</sup>、 霊<sup>たま</sup>り<sup>り</sup>言<sup>こと</sup>護<sup>まも</sup>社<sup>やしろ</sup>社<sup>やしろ</sup>  
 と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>っ<sup>っ</sup>だ<sup>だ</sup>て 泉<sup>いづみ</sup>し<sup>し</sup>神<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>の  
 ど<sup>ど</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>数<sup>かず</sup>は<sup>は</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>建<sup>た</sup>神<sup>かみ</sup>  
 め<sup>め</sup>で<sup>で</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>百<sup>ひゃく</sup>そ<sup>そ</sup>、して<sup>して</sup>官<sup>くわん</sup>  
 て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>集<sup>あつ</sup>人<sup>ひと</sup>年<sup>とし</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>て<sup>て</sup>に<sup>に</sup>  
 現<sup>いま</sup>あ<sup>あ</sup>落<sup>お</sup>家<sup>や</sup>後<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>社<sup>やしろ</sup>大<sup>おほ</sup>、お  
 代<sup>しろ</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>、ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>穴<sup>あな</sup>お<sup>お</sup>原<sup>はら</sup>願<sup>ねが</sup>  
 に<sup>に</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>な<sup>な</sup>自<sup>みづか</sup>す<sup>す</sup>名<sup>な</sup>ち<sup>ち</sup>湯<sup>ゆ</sup>い<sup>い</sup>  
 至<sup>いた</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>然<sup>ぜん</sup>ま<sup>ま</sup>前<sup>まへ</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>  
 り<sup>り</sup>、な<sup>な</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>湯<sup>ゆ</sup>命<sup>いのち</sup>神<sup>かみ</sup>て<sup>て</sup>  
 ま<sup>ま</sup>親<sup>おや</sup>り<sup>り</sup>、お<sup>お</sup>発<sup>はつ</sup>神<sup>かみ</sup>、  
 し<sup>し</sup>音<sup>ね</sup>、て<sup>て</sup>湯<sup>ゆ</sup>、 展<sup>ひら</sup>神<sup>かみ</sup>社<sup>やしろ</sup>少<sup>すくな</sup>薬<sup>くすり</sup>池<sup>いけ</sup>  
 た<sup>た</sup>。寺<sup>てら</sup>わ<sup>わ</sup>、の<sup>の</sup> し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>彦<sup>ひこ</sup>の<sup>の</sup>



利木 ↑

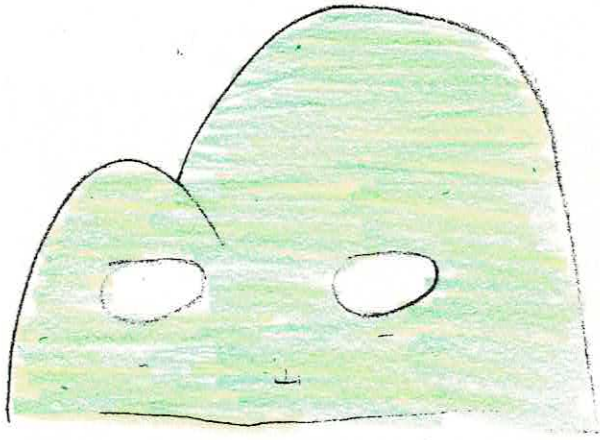
完

す薬たかりで  
 。師り多、矢すだ  
 にまく近立。が  
 祈せ、くの  
 念ん形に石  
 す。は梨薬  
 る菌普の師  
 とを通おは  
 、あで木、  
 たずあが珍  
 ちらる一し  
 まうが本い  
 ち人、花開  
 治が口穂の  
 る梨がて石  
 とを悪いを  
 い断なくまニ  
 わってし個  
 れて食た重  
 てこ用。ね  
 いのに結て  
 ま石は実記

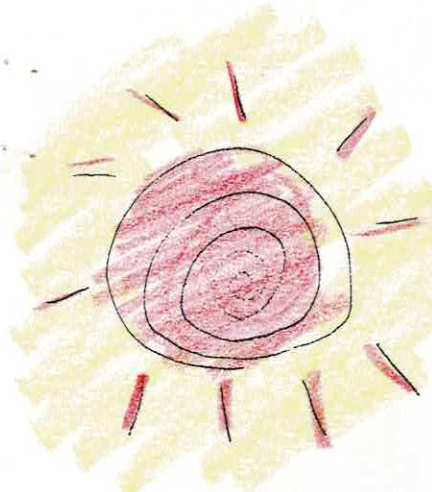
この石薬師にはもう一つの伝説があるの



十宝山の  
御神鏡物語



家けに 一い 持じ 神じん 米よね  
 来い 埋まい 殿だん さ 参さん 大お 武い 水み く 弥は 昔むかし  
 の 納の 落らく て さ 神か 天て けが さ 彦こ 乃  
 一い し し 一れ 様皇の 浦は ん 大お の  
 人り よ た 越ま は が 一の 神か お  
 で う 時とき 後ご し こ 即そ 寺て ら 家か 様ま 話し  
 あ と 一 地ち た の 位い 泊ど まい 来い が で  
 つ お 持じ 方ほう 。 時とき さ 町ち を 越え す  
 た 考か 参さん を 一れ 野の む 後ご 。  
 稚お え さ 開か い 大や て 積み き 地ち  
 彦の に れ 拓た く 和と 四よ 浜は つ 方ほう  
 命か な た す 朝ち ら 年ん 一れ の  
 に り た る 廷てい 目め に て 開か い  
 命か 一く 作さ かの 上じう 日に 拓た  
 令か そ さ 業ま ら 年し 陸り 本を  
 しの ん が た で さ 海が 女ご  
 ま 作の よ く し れ を め  
 し 業か 宝ち う さ た た 北き  
 た を を や さん の に  
 。 大たい 十じく の は 向む  
 切き 宝ち が 山やま 宝ち を  
 な 山やま



埋まい  
 納の 宝ち  
 した ま  
 え。



# ガビーン



な お たく たい 家け  
 っ お く く そ 切せ 来ら 種お  
 て ど な く さ ろ な と 産の  
 さ ろ っ ふ そ 埋ま 共毛 命じ  
 が い て の ろ 納の に は  
 し た 大 たい 宝た 作さ 作さ  
 ま 種お いる 物お 業ご 業ご 十と 最さ  
 し 彦ひ の も を 宝た 速さ  
 た 命じ と 中系 終お 行お 山ま  
 が を 始じ が で わ い の 長ま  
 御め 分わ も り ま 山ま 男ん  
 靴し かい に し 頂ま の  
 鏡き 家け り ち 近お に 小に  
 は 夾ら い した 登の 種お  
 み 一いち どう した 大た り 彦ひ  
 つ 同どう 切せ 夜よ 何始じ  
 かり 夕ひ ち 御ご 日ひめ  
 り 死し せ に も そ  
 せん。 神ん 鏡き が け て

御か 家けあ お 御死し  
 神ら 来な け 神ん  
 鏡は で た が 鏡で  
 を、 す は な が お  
 さ は 。 私い も わ  
 が た だ の 。 ど び  
 す ら か 大い そ っ を  
 の か ら 切とれ て し  
 け ず 今な に く も  
 す に 日 みる

思お  
 し い こ  
 か ' ま  
 し 十と  
 ' 宝た  
 そ 山 雑  
 れ を 席  
 を 下 命  
 聞山 げ  
 い し は  
 た ま 弥  
 大 大 大  
 神 神 神  
 様 様 様  
 は、  
 言こ  
 いう  
 ました。





長<sup>なが</sup>が<sup>が</sup>長<sup>なが</sup>男<sup>おとこ</sup>大<sup>おほい</sup>本<sup>ほん</sup>人<sup>ひと</sup>一<sup>いつ</sup>弓<sup>ゆみ</sup>  
 い男<sup>おとこ</sup>の神<sup>かみ</sup>の彦<sup>ひこ</sup>  
 長<sup>なが</sup>の神<sup>かみ</sup>の彦<sup>ひこ</sup>  
 い小<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>神<sup>かみ</sup>大<sup>おほい</sup>  
 旅<sup>たび</sup>の神<sup>かみ</sup>の彦<sup>ひこ</sup>  
 に彦<sup>ひこ</sup>あを様<sup>さま</sup>  
 出<sup>で</sup>をり授<sup>まか</sup>は  
 発<sup>はつ</sup>おがけ、  
 し共<sup>とも</sup>針<sup>はり</sup>まそ  
 まにいしたのよ  
 し連<sup>つ</sup>おたにうに  
 たれ言<sup>ことば</sup>葉<sup>は</sup>に命<sup>いのち</sup>  
 ま御<sup>ご</sup>神<sup>かみ</sup>彦<sup>ひこ</sup>命<sup>いのち</sup>  
 鏡<sup>かがみ</sup>彦<sup>ひこ</sup>命<sup>いのち</sup>はすぐに  
 さがし  
 の  
 に  
 命<sup>いのち</sup>  
 命<sup>いのち</sup>  
 命<sup>いのち</sup>  
 命<sup>いのち</sup>





そ小あ  
 のさるさ  
 まなタて  
 ま小た  
 う屋、そ  
 とに小の  
 うた継年と  
 とど彦も  
 とりは過す  
 眠つき大  
 りきまきて、  
 マしたな、  
 ンが山再  
 で、のび  
 し疲ふ春  
 まれもが  
 いのとめ  
 まあにぐ  
 しまあつ  
 たりるて  
 。、きた  
 た

一父  
 人が小  
 で出御  
 御発彦  
 神すは  
 金鏡る病  
 さと気  
 がきの  
 しに父  
 のさの  
 旅ず看  
 にか病  
 出つを  
 死た漁  
 し神師  
 ま剣夫  
 しを毒  
 た持に  
 。ち類  
 、み  
 再  
 び

御い	私	実	にお	弥	あ	山	何	た	ど	お	ま	白	深
神	達	は	ひ	探	な	の	を	ず	う	じ	し	長	ん
鏡	本	の	こ	そ	し	大	た	頂	か	ね	し	ろ	の
も	当	か	の	ん	に	神	が	上	ぐ	る	て	い	じ
実	に	わ	大	な	様	お	に	し	と	こ	た	い	と
は	因	い	わ	い	の	父	す	ま	こ	小	こ	さ	気
こ	い	し	る	て	御	さ	ん	し	で	維	か	ん	が
の	て	子	は	大	い	神	ん	て	よ	二	彦	と	つ
大	い	供	永	わ	る	鏡	と	い	う	人	り	か	お
わ	ま	や	年	し	御	の	一	る	で	で	と	ば	と
し	す	孫	に	が	神	行	諸	白	実	泣	あ	い	あ
が	を	わ	持	鏡	た	に	鳥	は	い	い	さ	小	こ
十	と	弥	年	た	は	を	永	で	て	い	ん	維	界
宝	彦	た	っ	て	知	年	ご	私	い	る	が	彦	座
山	大	食	て	い	こ	探	が	達	る	ん	座	の	座
頂	神	い	大	ま	の	て	し	い	は	ん	で	杖	杖
か	様	殺	あ	す	山	い	求	ま	い	で	す	元	元
ら	の	し	ば	お	る	め	す	こ	の	か	つ	泣	に
ぬ	大	て	れ	く	着	て	の	先	の	か	つ	い	上
す	事	し	し	深	で	い	先	の	の	か	つ	て	品
み	な	ま	く	す	る	の	の	の	の	か	つ	い	な



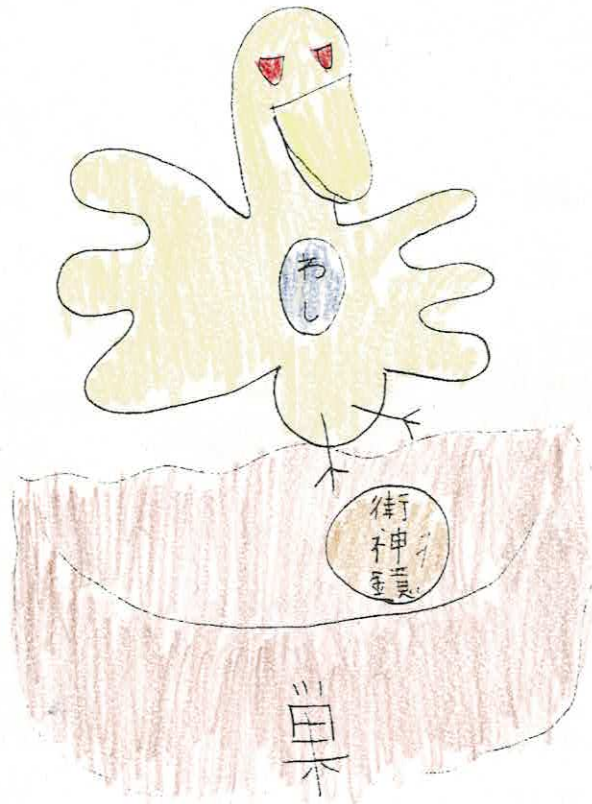


てと  
 し、救<sup>きう</sup>辰<sup>しん</sup>とが あてにしし取<sup>と</sup>  
 ま、涙<sup>なみだ</sup>すうあないかてか  
 い、な下<sup>した</sup>とぞりたるか偶<sup>ぐ</sup>して  
 まがさと、まのおり然<sup>ぜん</sup>、来<sup>き</sup>  
 しらいもこし忠<sup>ちゅう</sup>父<sup>ふ</sup>となで今<sup>いま</sup>た  
 たに、にのよ臣<sup>しん</sup>さがは日<sup>ひ</sup>の  
 語<sup>ことば</sup>、大<sup>おほ</sup>う孝<sup>こう</sup>んらあ、で  
 り永<sup>えい</sup>わ。子<sup>こ</sup>のもりあす。  
 終<sup>はつ</sup>が年<sup>とし</sup>を、のおあまな。  
 わる苦しお導<sup>みちび</sup>なせた  
 るし征<sup>せい</sup>心<sup>こころ</sup>きたんが  
 と、め伐<sup>はつ</sup>にだの。こ  
 す、らしはと手<sup>て</sup>弥<sup>や</sup>こ  
 一<sup>ひと</sup>て、必<sup>かならず</sup>思<sup>おも</sup>願<sup>ねが</sup>両<sup>りょう</sup>方<sup>はう</sup>へ  
 っ、き御<sup>ご</sup>す、いを大<sup>おほ</sup>来<sup>き</sup>  
 と、た神<sup>かみ</sup>やまお神<sup>かみ</sup>ら  
 姿<sup>すがた</sup>、和<sup>わ</sup>鏡<sup>かがみ</sup>天<sup>てん</sup>す。待<sup>まち</sup>様<sup>さま</sup>れ  
 が、達<sup>たち</sup>のちとた  
 消<sup>き</sup>え、を、取<sup>と</sup>す、の  
 ありけ、病<sup>びょう</sup>に、決<sup>けつ</sup>



しが飛と見をけと  
 をてんこえし始、今  
 発山で喜ぬるためおの  
 見灯真ゆんこでそどは  
 しのくでそはう上ろ  
 ま大あ小正あに空い  
 し岩と稚夢りぐにて  
 たにを彦だまるはあ  
 止追は！せん羽か  
 まいすぐか輪の  
 てつさまを大見  
 目ま描白渡  
 を山身い鳥す  
 光お支てがと  
 らく度た飛とあ  
 せ深をんたす  
 てくしでかて  
 い入、いもに  
 るり白は道夜  
 大鳥あ次案も  
 わやのが内月

ハ  
 ！  
 と目  
 覚  
 め  
 た  
 小  
 稚  
 彦  
 が



大おぐ" め よ  
 わ さ て く  
 し ま い 見み  
 に 弥やたる  
 立た彦御と  
 ち 大お神しん  
 向む申か鏡きか  
 か よ が た  
 い り 見みわ  
 ま 授ざえら  
 し け る の  
 た ら で 巢す  
 。 れ は の 中  
 た あ り 中  
 神しん には  
 剣けん には  
 を 。  
 振ふ小=永なが  
 り 稚わかん  
 は 彦ひさか  
 ら は し  
 い、 す 求もと

喜鏡えの  
 んをの父喜  
 で取継のび  
 弥彦所の  
 彦出命へ涙  
 にすの急に  
 帰と枕いく  
 ろ元だれ  
 うたに小る  
 とちよ継白  
 しまう彦鳥  
 たちやはに  
 と継く見  
 こ彦帰今迷  
 ろ命りら  
 での着まれ  
 し病きさな  
 た気にか  
 。も早息ら  
 な速た  
 お御え病  
 り、神だ気



取び  
 りし力  
 戻て戦  
 す見奮  
 こ事瀾  
 とす  
 が大る  
 でわこ  
 できしと  
 たをし  
 の退ば  
 です。治し  
 めいに  
 た神  
 く剣  
 御を  
 神振  
 鏡り  
 をか

此のときす  
 以まなあこ 稚<sup>わか</sup>  
 後ま<sup>つ</sup>おと彦<sup>ひこ</sup>  
 'にてぎが命<sup>いのち</sup>  
 長<sup>なが</sup>輝<sup>かがや</sup>は'でと  
 くびど地<sup>ち</sup>き小<sup>こ</sup>  
 守<sup>まも</sup>りとうにた稚<sup>わか</sup>  
 護<sup>まも</sup>り宝<sup>たから</sup>すふ御<sup>ご</sup>流<sup>なが</sup>  
 に山<sup>やま</sup>るし神<sup>かみ</sup>は  
 あ頂<sup>たか</sup>こて鏡<sup>かがみ</sup>  
 たにとなを永<sup>なが</sup>  
 '深<sup>ふか</sup>もげ大<sup>おほ</sup>年<sup>とし</sup>  
 たくでき神<sup>かみ</sup>か  
 と御<sup>ご</sup>き悲<sup>かな</sup>のけ  
 伝<sup>つた</sup>ねずし御<sup>ご</sup>て  
 え鏡<sup>かがみ</sup>'み廟<sup>やしろ</sup>よ  
 らを弥<sup>や</sup>ま前<sup>まへ</sup>や  
 れ埋<sup>う</sup>彦<sup>ひこ</sup>しにや  
 て納<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>た供<sup>とも</sup>く  
 いし神<sup>かみ</sup>がえ取<sup>と</sup>  
 ま'の'り  
 す。そ命<sup>いのち</sup>今<sup>いま</sup>天<sup>あま</sup>辰<sup>つち</sup>も



しま  
 たし急<sup>いそ</sup>  
 'たい  
 がで  
 '弥<sup>や</sup>  
 弥<sup>や</sup>彦<sup>ひこ</sup>  
 彦<sup>ひこ</sup>に  
 大<sup>おほ</sup>割<sup>わり</sup>帰<sup>かえ</sup>  
 神<sup>かみ</sup>つ  
 様<sup>さま</sup>て  
 はこ  
 この  
 のこ  
 現<sup>げん</sup>と  
 世<sup>よ</sup>を  
 を報<sup>ほう</sup>  
 去<sup>さ</sup>告<sup>こ</sup>  
 っし  
 たよ  
 あう  
 とと  
 でし

あ と が き

こんにちは。わたしたち「I LOVE 弥彦(彌彦)小  
学校(がっこう)六年生(なんせい)が作った(つく)た弥彦伝説集(やまこでんせつしゅう)は楽しんで(たの)いた  
だけ(だけ)ましたか(か)?

百冊(ひゃくさつ)も作(つく)ったから、色(いろ)ぬりが大(たい)変(へん)でした。きり  
きり完(かん)成(せい)してよ(よ)か(か)っ(っ)たで(で)す。

この本(ほん)の作(さく)成(せい)にあ(あ)たり、弥彦郷土誌(やまこきょうどし)十(じゅう)号(ごう)を参(さん)考(こう)

に(に)さ(さ)せ(せ)て(て)い(い)た(た)だ(だ)き(き)ま(ま)し(し)た(た)。ま(ま)た、小川(おがわ)さん(さん)に(に)も

お世話(せわ)に(に)な(な)り(り)ま(ま)し(し)た(た)。あ(あ)り(り)が(が)と(と)う(う)ご(ご)ざ(ざ)い(い)ま(ま)し(し)た(た)。

わたしたち(たち)が心(こころ)を(を)こ(こ)め(め)て(て)作(つく)っ(っ)た(た)こ(こ)の(の)伝説集(でんせつしゅう)を

大(たい)切(せつ)に(に)と(と)っ(っ)て(て)お(お)い(い)て(て)下(くだ)さい(さい)。

by I LOVE 弥彦

